

憧れの「HP-35」

憧れのヒューレット・パッカートの関数電卓「HP-35」が手に入ってしまった。赤い LED 表示のオリジナル。動くのは勿論、マニュアル、元箱、全て揃った、正に「博物館クラス」のお宝。

骨董機械のコレクションが増え続け、進化の歴史が見え隠れするようになると、歴史を語る上で欠かせない逸品が欲しくなる。私はコレクターとは少し違うし、近頃流行のネット・オークションも食わず嫌いでやらないけれど、欲しいなあ、と公言だけは多方面にしてあった。ある日突然、カリフォルニアの知らない人から国際宅急便が届き、「まさか手紙爆弾では？」などと、軽口を叩きながら開けてみると、何と HP-35。娘婿が手配してくれたのだろうと、直ぐに察しがつき、メールでお礼を言うと、還暦祝いのプレゼントだと言って来た。嬉しいなあ。



1972年発売、世界初の「ポケットサイズ関数電卓」である。アメリカでの価格は 395ドルだったが、当時は円の為替レートが 250円くらいの時代で、日本では総代理店の横河ヒューレット・パッカート（YHP）が 99,500円で発売。同年、大学を出たばかり、初任給 55,000円の新入社員の私に買える筈もない値段だが、雑誌「科学朝日」の広告ページを保存してあるとは、欲しかったのかなあ、と他人事みたいに思う。

当時、どんな人々が買ったのだろうか？ 朝から晩まで計算尺まみれだった人？ 必要性はあってもお金がなさそう。計算が速くなればお金の儲かる人？ 科学計算は所詮お金にならない。マニュアルには、「ジェームズ・ボンドのようなヒーローと同じ道具をあなたにも・・・。」とある。後継機の「41CV」がスペースシャトルに船内実験用と航行コンピュータの予備機を兼ねて搭載されるまでは、作る方も詰め切れていなかったかも知れない。要するに、何時の世にもお金持ちが最初、ということか。

充電式のニッカド電池は流石に寿命が尽きており、公害問題から新品は入手困難。外部電源で動作はするけれど、昔の姿を楽しむため、電圧が同じ 1.2V、今でも入手可能なニッケル水素電池を起用し、電池室に収めるアダプターを手作り。昔通りの姿で動くようになった。



(初出 June 29, 2008)
(改訂 Feb. 29, 2012)